

6) 第2節 豊かな人生を支える福祉社会の実現 第1項 多様な生きがい感のある環境づくり

目的：生涯を通して、自分に合った社会参加ができ、生きがい感をもてるようになる
 指標：生きがい感をもっている人の割合

目的

生涯を通して、心豊かに生活するためには、社会（家庭を含む）の中で自分の居場所が認知され、自分の希望や自分にあった活動ができることが重要であると考えます。

指標

生涯にわたり、その意欲や能力に応じて地域活動や就労等の社会参加の機会をもち、年齢や身体状況に係わりなく、いつでも心のはりや生きがいを持ち続ける人を増やすことを目指します。

設問

この指標は、次の設問により直接的に聞いている。「個人・態度（認知）」

あなたは日頃、生活の中で生きがいを感じていますか。（1つに ）

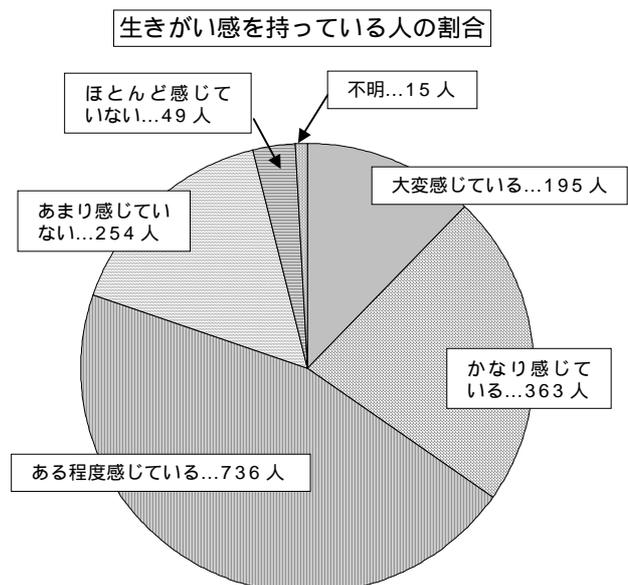
- 1 大変感じている 2 かなり感じている 3 ある程度感じている
 4 あまり感じていない 5 ほとんど感じていない

指標の現状（値）

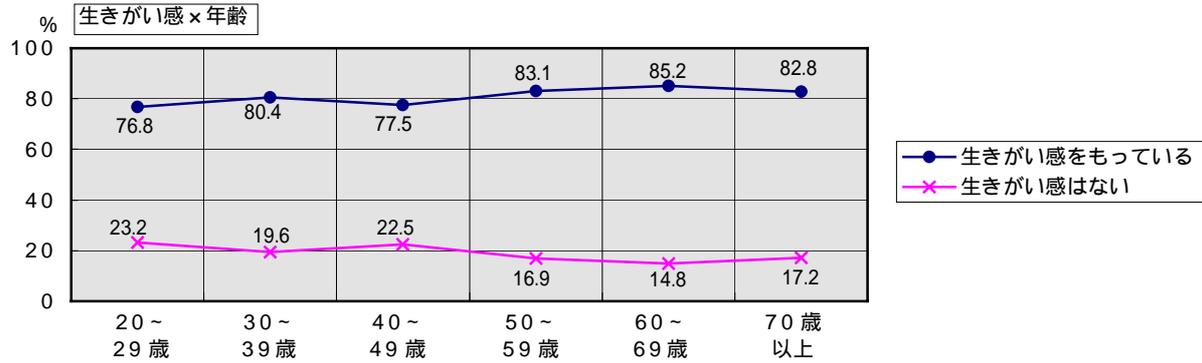
カテゴリー	割合
大変感じている	12.1%
かなり感じている	22.5%
計	34.6%

指標の分析

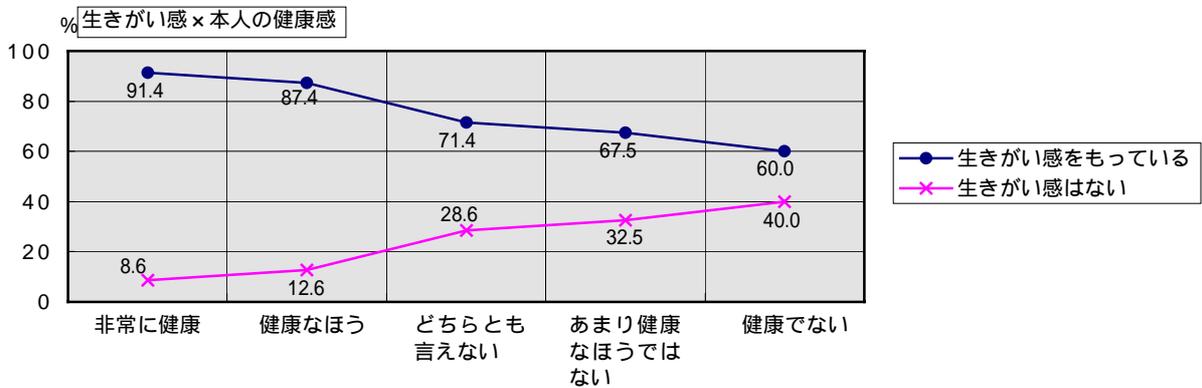
生きがいを強く感じている人は、34.6%で、生きがい感をもつ人を合わせると80.3%と大変多いが、生きがいを感じていない人が18.8%いることも見逃せない。



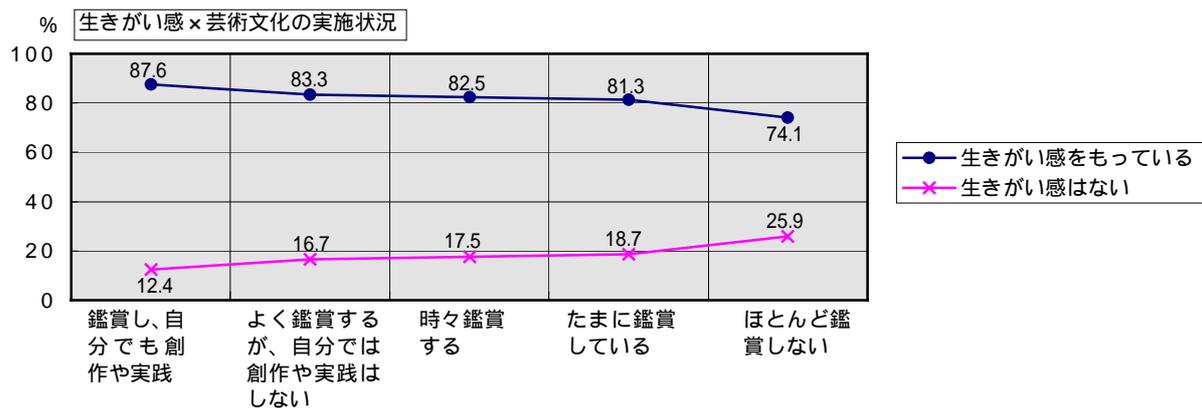
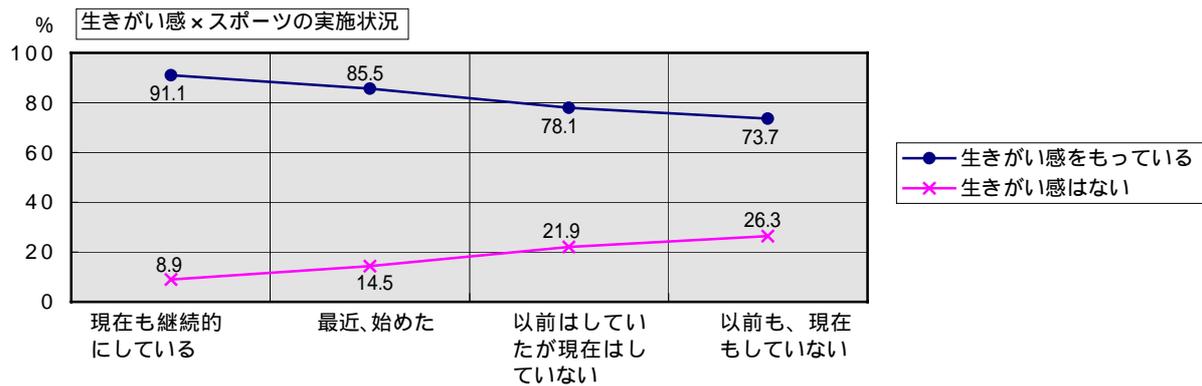
次に、年齢別に見ると、50歳未満の世代より、50歳以上の世代の方が生きがい感を持っている人が若干高い傾向がある。特に、定年後の60歳代が特に高い。



また、本人の健康感との関係を見ると、健康状況に比例して、生きがい感が高まる。生きがいを感じる要因の1つとして健康は重要であると思われる。



さらに、スポーツや芸術文化活動との関係を見ると、活動をしている人の方が生きがいを感じている。



7) 第2節 豊かな人生を支える福祉社会の実現 第2項 健康の維持・増進

目的：生涯を通して、健康に良いと思う行動や身近な人の健康に配慮ができ、病気や障害をもつことになっても、自分に合った健康生活が送れるようになる

指標：本人が健康であると思う人の割合

目的

すべての人が生涯を通してその持てる能力を発揮し、人生をまっとうするために健康はその前提となる重要なものです。自分の健康は自分で守り、つくり、身近な人の健康に配慮をすることが必要であり、本人の意思や努力にもかかわらず病気や障害を持たざるを得なくなっても、病気や障害とうまくつきあい、その人の置かれた状況に応じて健康な生活が送れるようにすることが重要であると考えます。

指標

健康は、あらゆる社会活動と市民生活の基盤であり、病気や障害を持つことになっても、その人の置かれた状況に応じて健康な生活が送れることが必要となります。そこで、本人が健康であると思う人の割合を増やしていくことを目指します。

設問

この指標は、次の設問により直接的に聞いている。「個人・態度（認知）」

あなたは今、健康だと思えますか。（1つに ）

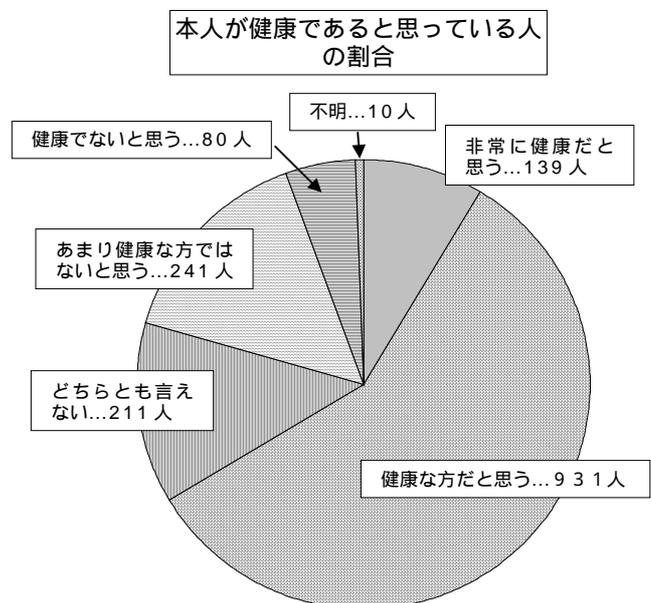
- 1 非常に健康だと思う 2 健康な方だと思う 3 どちらとも言えない
- 4 あまり健康な方ではないと思う 5 健康でないと思う

指標の現状（値）

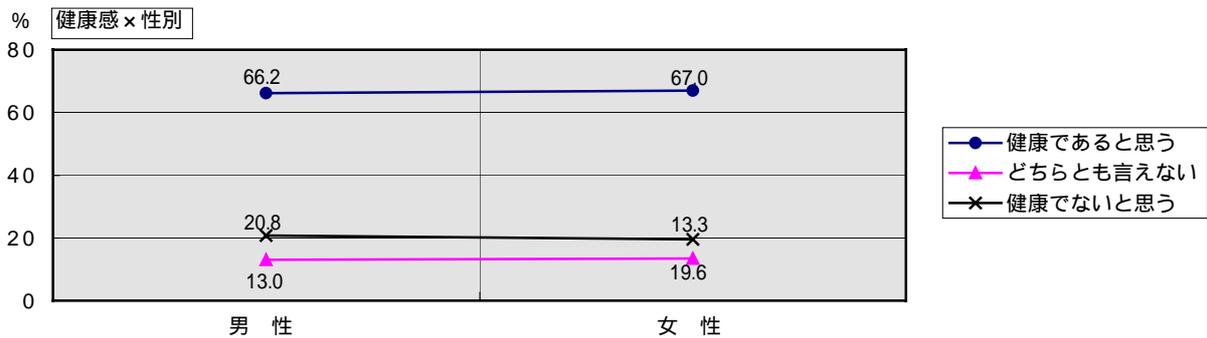
カテゴリー	割合
非常に健康だと思う	8.6%
健康な方だと思う	57.8%
計	66.4%

指標の分析

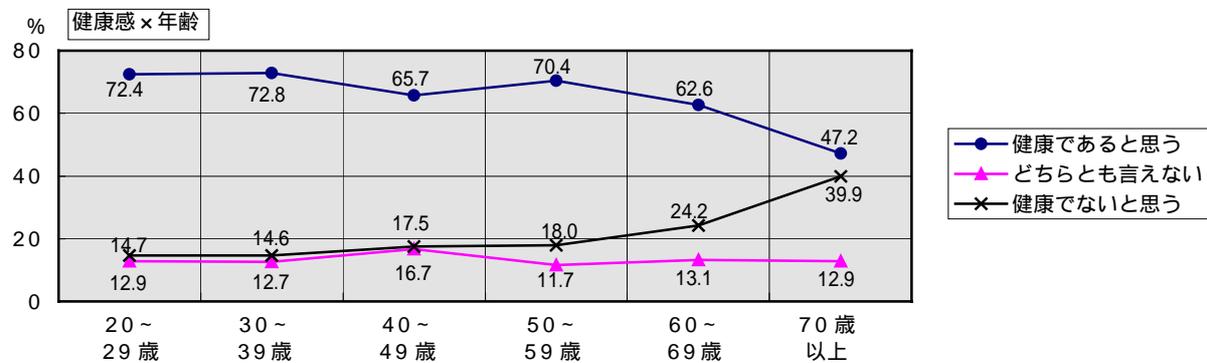
健康であると思う人は66.4%と2/3を占めている。一方、健康でないと思う人は19.9%に留まっている。自分の健康のことであるため「どちらとも言えない」と態度を保留する人が少ない。



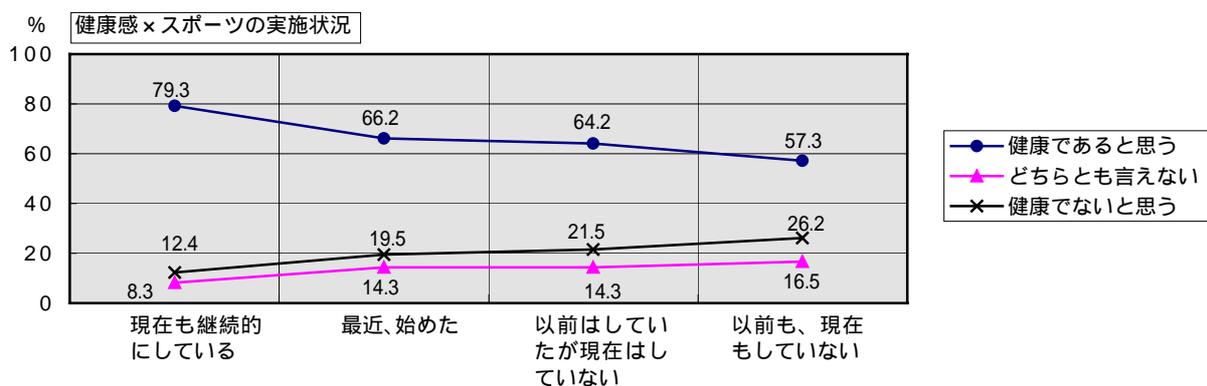
次に、性別で見ると、健康である人にはほとんど差が見られないが、「どちらとも言えない」と態度を保留する女性が若干多く、健康でない人は男性が若干多い。



また、年齢別に見ると、健康であると思う人は、60歳代から減少し始め、70歳代以上になると急激に減少する。



さらに、スポーツとの関係を見ると、スポーツを継続的に実施している人が健康だと考える割合が高い。しかし、全くスポーツを実施しなくても5割以上が健康であると思っている人がいることも見逃せない。



8) 第2節 豊かな人生を支える福祉社会の実現 第3項 日常生活および緊急時の安全・安心性の向上

目的：生涯を通して、必要な時に必要度に応じて十分な医療、介護、保護、支援などのサービスが受けられ、生活する上での安心感がもてるようになる

指標：日常生活（心配事が起きた時を含む）に対するの安心感をもつ人の割合

目的

生涯を通してそれぞれのライフステージの中で、急病、事故による受傷、要介護状態（経済的な自立が困難になった場合を含む）、虐待、家庭内暴力への対応など日常生活におけるさまざまな不安や心配事を解消し、安心感を高めることが重要であると考えます。

指標

ここ数年の社会的・経済的状况による生活保護世帯の増加、万が一のための救急医療体制、高齢化社会の進展による要介護者の増加等、市民を取り巻く社会環境のなかで、日常生活上のセーフティネット（安全網）を確立し、生活する上での安心感の向上を目指します。

設問

この指標は、次の設問により逆説的に聞いている。「個人・態度（認知）」

あなたは今、生活の中で不安になったり、心配になったりすることがありますか。気になることがあれば、（全てに ）

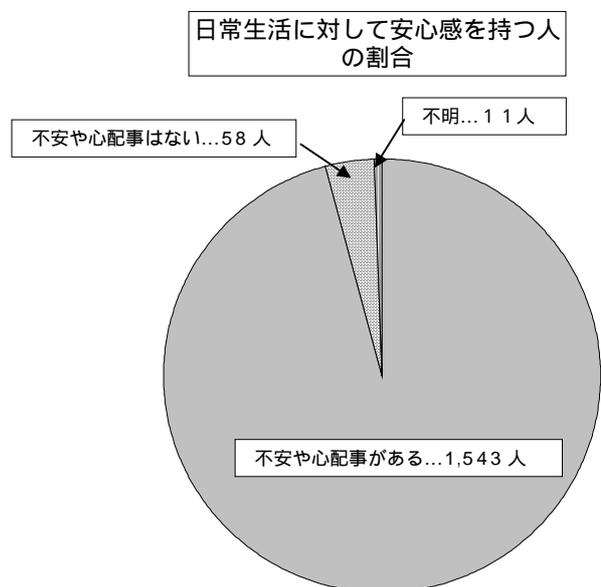
- 1 自分の健康 2 家族の健康 3 将来自分や家族が必要になったときの介護
- 4 現在の生活や家計 5 将来の生活や家計 6 仕事
- 7 出産や子育て 8 子どもの将来 9 住居や住まい
- 10 財産や資産 11 人との付き合い 12 生きがい
- 13 その他（ ） 14 特にない

指標の現状（値）

カテゴリー	割合
特にない	3.6%

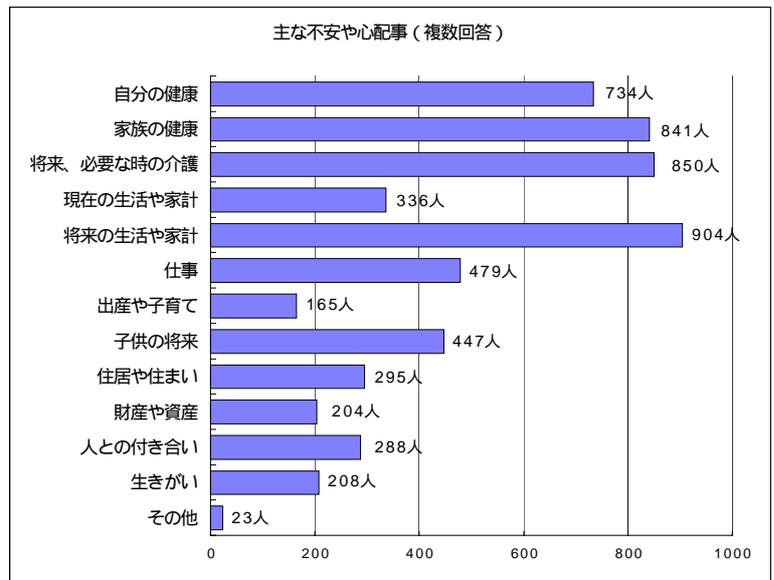
指標の分析

日常生活の中で、何らかの不安や心配事を感じている人は95.7%とほとんどの人が感じている。

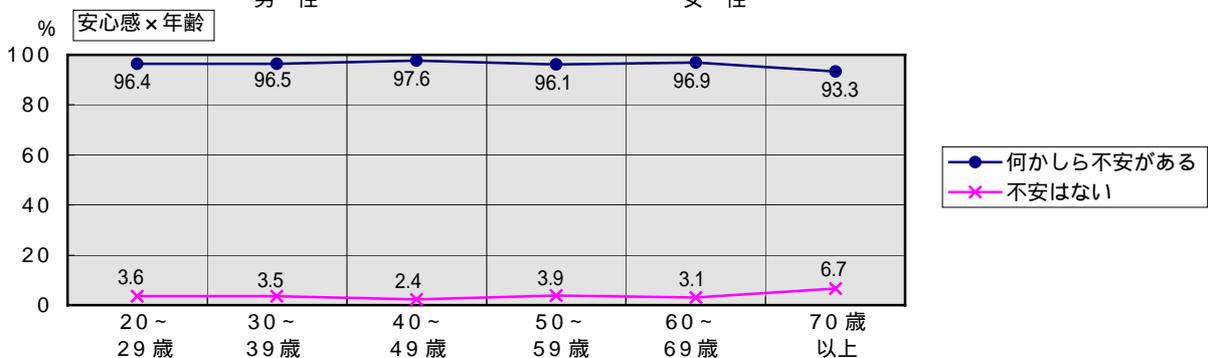
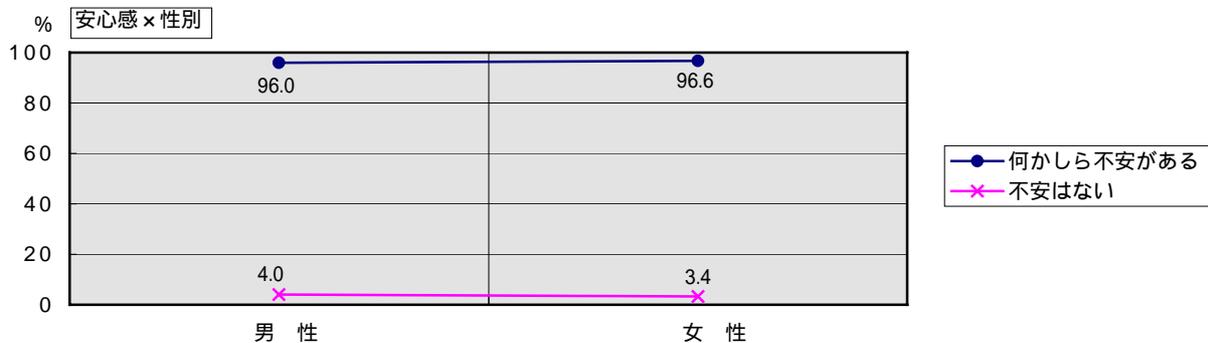


特に、不安や心配事の内容としては、自分を含む家族の健康や家計などは、現在から将来に渡り、回答者の半数以上が気にしていることになる。

また、その他には「日本の将来」12人、「治安」3人などがあつた。



次に、性別や年齢別に見ても、大多数の方が、不安や心配事を持っているため、偏りは見られない。



さらに、現在の行政サービスに「非常に満足している」方でさえ、全員の方が何らかの不安を抱いている。つまり、行政サービス以外にも不安や心配事の要因は多々あると言える。

